

# 臨地実習における実習効果を高めるための検討

## Examination to Improve Effect of Practice in Field Practice

(2005年3月31日受理)

北島 葉子 Yoko Kitajima	川上 祐子 Yuko Kawakami	横山 純子 Junko Yokoyama	村上 淳 Jun Murakami
高 早苗 Sanae Ko	佐々木敦子 Atsuko Sasaki	上田由喜子 Yukiko Ueda	菅 淑江 Yoshie Suga

Key words : 臨地実習, 学生の意識調査, 事前・事後学習, 教育目標, 専門的知識・技術

### 要 約

平成14年改正の管理栄養士課程新カリキュラムに沿った, 初めての臨地実習を平成16年度に実施した。学生が期待する内容や理解度を把握するために, 実習前後に学生の意識調査を行った。さらに, 実習施設からの評価を参考にし, 今後の教育・指導の方向性について検討を行った。

1. 学生の臨地実習に対する期待は高く, 理解度に対する自己評価も高い結果であったが, 臨地実習施設からの評価と差が生じていた。
2. 3年前期に開講される管理栄養士実務演習(臨地実習事前学習)が臨地実習のスタートではなく, 「コミュニケーション」, 「礼儀・作法」については, 1年次から教育することが必要である。学生一人ひとりが目的意識をしっかりともち, 学内の講義や実習に取り組むことが臨地実習の効果を高める上で重要である。
3. 学生の臨地実習に対するモチベーションを高めるためには, 事前学習に十分な時間をとり, 予備知識と心構えを教育する必要がある。
4. 養成施設の教員と臨地実習施設の指導者が連絡を密にして, 連携した教育体制の構築が必要である。実習終了後の報告会には, 実習施設担当者, 臨地実習担当外の教員の参加を求め, 活発な討議を行う会にすることで, 学生の視野を広めることができる。

### はじめに

平成13年9月, (社)日本栄養士会と(社)全国栄養士養成施設協会が連携し, 「臨地・校外実習のあり方検討会」を設置して検討を重ね, 平成14年10月にその結果をまとめた「臨地・校外実習の実際—改正栄養士法の施行にあたって」が発刊された<sup>1)</sup>。これを受けて岡山県では, 県栄養士会と県栄養士養成施設協会の連携のもと, 各協議会の研修会などを活用し養成校と実習施設が共通認識を持つための情報交換を行ってきた。

臨地実習の教育目標は, 「実践活動の場での課題発見,

解決を通して, 栄養評価・判定に基づく適切なマネジメントを行うために必要とされる専門的知識及び技術の統合を図る。」とされている。この教育目標を実現するための実習科目, 具体的な目標, 実習施設, 養成施設の関係を示す(図1)。

臨地実習に対して, 養成施設では「専門的知識と技術を統合させる」ために必要な教育を実習前に行い, 実習後にも十分な教育を行うことが求められる。臨地実習は「学内で修得する知識・技術を栄養管理の実践の場面に適用し, 理論と実践を結びつけて理解できること」をねらいとして充実強化を図らなければならない<sup>2)</sup>。本学の

平成16年度臨地実習の実施状況は、8月30日から10月8日の間で、2週間～4週間の実習を行った。臨床栄養分野では、病院18施設、老人福祉施設9施設で1～2週間の実習を行った。公衆栄養分野では岡山市保健所で2日

間の集中講義を受け、その後3日間を保健所5施設、保健センター8施設で実習した。給食管理分野では小学校13校、中学校1校、事業所4施設、病院7施設、老人福祉施設6施設で1～2週間の実習を行った。

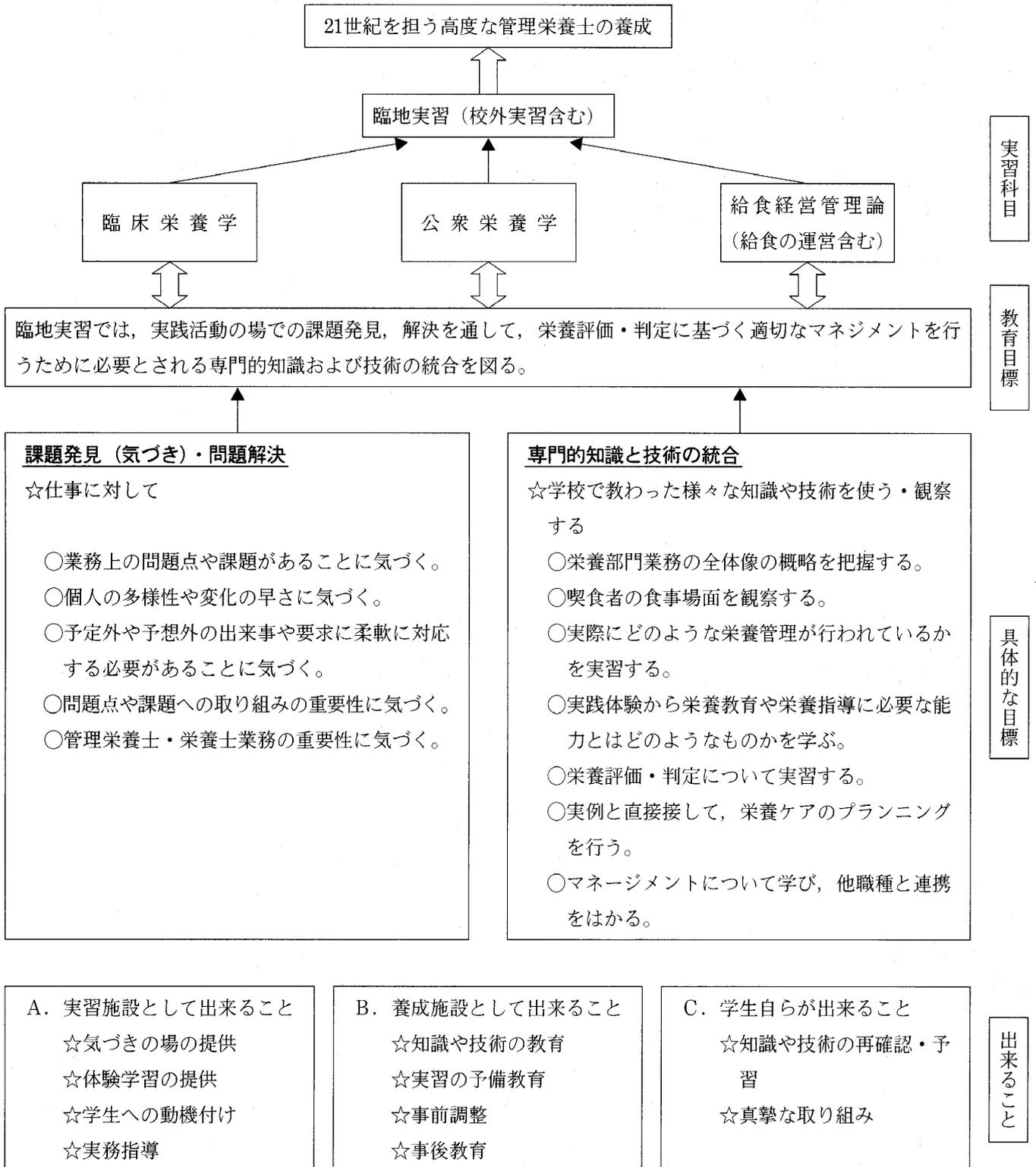


図1 実習科目と具体的な実習目標と実習施設や養成施設の関係<sup>2)</sup>

本研究は、臨地実習前後に学生の意識調査を実施し、学生が期待する内容と理解度を把握し、さらに実習施設からの評価も考慮に入れ、事前・事後教育の充実、実習施設との連携強化（共通認識と情報交換）、効果的な実習教育法、今後の教育・指導の方向性について検討し実習効果を高めることを目的とした。

## 調査対象および方法

### 1. 調査対象と調査方法

対象は中国学園大学現代生活学部人間栄養学科の3年生（編入生含む）60名とした。実習前調査は、平成16年8月（臨地実習直前）、実習後調査は平成16年10月（臨地実習終了後）に授業時間の一部を利用し、質問紙法（自己記入形式）により実施した。分析対象は、実習前後の両方の調査に回答した60名で回収率は100%であった。

### 2. 調査内容

実習前調査は、臨床栄養分野・公衆栄養分野・給食管理分野の3分野について「臨地実習を体験することで、管理栄養士業務をどの程度学ぶことができると期待しているか」を「かなり期待できる」：2点、「少し期待できる」：1点、「あまり期待できない」：-1点、「全く期待できない」：-2点の4段階評価で回答させた。

実習後調査は、実習前に期待していた項目の理解度について「かなり理解できた」：2点、「少し理解できた」：1点、「ほとんど理解できなかった」：-1点、「全く理解できなかった」：-2点の4段階で評価させた。「学習力」、「体力」、「あいさつ」、「礼儀・作法」、「人間関係」について、実習前には不安の程度、実習後では実行度として4段階で評価させた。さらに、実習前後における管理栄養士としての就業意識を調査した。なお、本調査は、平成15年の西村ら<sup>3)</sup>の報告を参考に、調査項目等を一部改変して実施した。

実習施設からの評価表に記入されていた総合評価および意見を参考とした。

なお、検定法はスチューデントのt検定と3群間の比較を一元配置分散分析についてエクセル統計2000を用いて行った。

## 結果および考察

### 1. 臨地実習に対する期待と実習後の理解度

#### 1) 臨床栄養分野

臨地実習に対する期待と実習後の理解度を「管理栄養士像」、「組織と栄養部門の位置付け」、「チーム医療・連携体制」、「管理栄養士と患者との関わり」、「栄養教育（指導）」、「アセスメントや栄養補給の決定」、「病院における栄養補給と食事管理」、「他職種との関わり」、「学習の仕方」の項目に区分し、それぞれの質問項目で調査した結果を示した（表1）。

期待度の高かった項目は、「管理栄養士と患者との関わり」、「管理栄養士像」、「病院における栄養補給と食事管理」であった。一方、期待度の低かった項目は、「チーム医療、連携体制」、「アセスメントや栄養補給の決定」であった。

理解度の高かった項目は、「管理栄養士像」、「管理栄養士と患者との関わり」であり、期待度の高かった項目と一致していた。これらの項目は、新カリキュラムでは授業時間が増加していたため、学内の授業で理解できていたと思われる。一方、理解度の低かった項目は、「アセスメントや栄養補給の決定」、「学習の仕方」であった。「学習の仕方」の理解については、臨床栄養分野では給食管理分野に比べ有意に低値であった（ $p=0.0302$ 、一元配置分散分析）。

これは、臨地実習施設によって、カルテの閲覧はどの程度まで可能か、会議の参加は、医師や医療スタッフとの交流、チーム医療への参画、担当患者のアセスメント、栄養指導の見学等の対応できる範囲が違ってくるのが影響していると考えられる<sup>4)</sup>。とくに、臨床栄養分野の実習施設27施設中、9施設が老人福祉施設であったことも影響していると考えられる。臨床栄養分野の教育目標は「傷病者に対する療養のため必要な栄養指導」等、個人の身体状況、栄養状態に応じた専門的知識、それらの業務を円滑に行うために個の人間を対象に対応できる高度な知識・技術・人間性を学ぶことである<sup>5)</sup>。実習施設と実習目標や内容についての打ち合わせ会等を行い、実習施設の特徴や実習プログラムを把握することで解決できると考えられる。また、実習施設では、実習のために

多くの時間を割いて学生に対応していただいているが、養成施設の要望をすべて受け入れることは、管理栄養士の配置人数からみて不可能と思われる。栄養士の改正

にそって、患者を対象とした管理栄養士の業務拡大と管理栄養士の適切な人員配置がなされるよう、実習施設と養成施設の協力が必要と考えられる。

表1 臨地実習に対する期待と実習後の理解度（臨床栄養分野）

単位：人数(%)

項目	実習前の期待の程度					実習後の理解の程度				
	かなり期待できる	少し期待できる	あまり期待できない	全く期待できない	評価平均点 平均±標準偏差	かなり理解できた	少し理解できた	ほとんど理解できなかった	全く理解できなかった	評価平均点 平均±標準偏差
管理栄養士像	37(61.7)	19(31.7)	4(6.7)	0(0.0)	1.48±0.81	43(72.9)	14(23.7)	2(3.4)	0(0.0)	1.66±0.66
組織と栄養部門の位置付け	20(33.3)	35(58.3)	5(8.3)	0(0.0)	1.17±0.81	31(51.7)	28(46.7)	1(1.7)	0(0.0)	1.48±0.60
チーム医療、連携体制	19(31.7)	30(50.3)	11(18.3)	0(0.0)	0.95±1.03	26(43.3)	27(45.0)	7(11.7)	0(0.0)	1.20±0.94
管理栄養士と患者との関わり	41(68.3)	18(30.0)	1(1.7)	0(0.0)	1.65±0.58	42(70.0)	16(26.7)	2(3.3)	0(0.0)	1.63±0.66
栄養教育（指導）	29(49.2)	22(37.3)	6(10.2)	2(3.4)	1.19±1.09	31(52.5)	20(33.9)	5(8.5)	3(5.1)	1.20±1.14
アセスメントや栄養補給の決定	24(40.0)	25(41.7)	11(18.3)	0(0.0)	1.03±1.07	17(28.3)	34(56.7)	7(11.7)	2(3.3)	0.95±1.03
病院における栄養補給と食事管理	32(53.3)	23(38.3)	5(8.3)	0(0.0)	1.40±0.81	33(57.9)	20(35.1)	2(3.5)	2(3.5)	1.40±0.94
他の職種との関わり	16(26.7)	36(60.0)	8(13.3)	0(0.0)	1.27±0.45	20(33.3)	35(58.3)	5(8.3)	0(0.0)	1.17±0.81
学習の仕方	22(37.3)	33(55.9)	4(6.8)	0(0.0)	1.24±0.77	16(27.1)	39(66.1)	4(6.8)	0(0.0)	1.14±0.73

## 2) 公衆栄養分野

臨地実習に対する期待と実習後の理解度を「管理栄養士像」、「組織」、「地域の実態把握・分析・施策化・評価」、「人材育成・地区組織等の育成」、「市町村に対する支援・連携対策作り」、「食環境の整備（栄養成分表示の推進等）」、「食生活支援・専門的栄養教育（指導）」、「健康教育・健康相談・栄養教育（指導）」、「学習の仕方」それぞれの質問項目で調査した結果を示した（表2）。

期待度の高かった項目は、「健康教育、健康相談、栄養教育（指導）」、「地域の実態把握・分析・施策化・評価」であった。一方、期待度の低かった項目は、「食環境の整備（栄養成分表示の推進等）」、「管理栄養士像」であった。「管理栄養士像」の期待については、公衆栄養分野では臨床栄養分野および給食管理分野に比べ有意に低値であった（ $p=0.0093$ ,  $p=0.0054$ , 一元配置分散分析）。

理解度の高かった項目は、「管理栄養士像」、「健康教育、健康相談、栄養教育（指導）」であった。一方、理解度の低かった項目は、「食生活支援、専門的栄養教育

（指導）」、「食環境の整備（栄養成分表示の推進等）」、「学習の仕方」であった。「管理栄養士像」、「学習の仕方」の理解については、公衆栄養分野では給食管理分野に比べ有意に低値であった（ $p=0.0443$ ,  $p=0.0079$ , 一元配置分散分析）。

公衆栄養分野の教育目標は、健康・栄養問題を取り巻くさまざまな情報を収集・分析し、それらを総合的に評価・判定することを学ぶ。さらに、対象に応じた適切な健康関連サービスを提供するプログラムの作成・実施・評価の過程を通じて総合的なマネジメントに必要な事項について学習することである<sup>5)</sup>。このような教育目標に沿った項目に期待していることがわかる。学内における公衆栄養分野の講義は、「公衆栄養学Ⅰ」、「公衆栄養学実習Ⅰ」は終了しているが、「公衆栄養学Ⅱ」は3年後期に開講するため、臨地実習前には終了していない。このようなことが、調査結果に影響を与えているのではないかと考えられる。

また、公衆栄養分野の臨地実習は集中講義が2日間あり、各保健所、保健センターでの実習は3日間と短い。

可能であれば2日間の集中講義は別途行い各保健所、保健センターでの実習を5日間行うことが望ましいと考えられる。

表2 臨地実習に対する期待と実習後の理解度（公衆栄養分野）

単位：人数(%)

項目	実習前の期待の程度					実習後の理解の程度				
	かなり期待できる	少し期待できる	あまり期待できない	全く期待できない	評価平均点 平均±標準偏差	かなり理解できた	少し理解できた	ほとんど理解できなかった	全く理解できなかった	評価平均点 平均±標準偏差
管理栄養士像	16(39.0)	18(43.9)	7(17.1)	0(0.0)	1.05±1.05	24(55.8)	19(44.2)	0(0.0)	0(0.0)	1.56±0.50
組織	15(36.6)	22(53.7)	3(7.3)	1(2.4)	1.15±0.94	15(34.8)	26(60.5)	2(4.7)	0(0.0)	1.21±0.86
地域の実態把握、分析、 施策化、評価	23(57.5)	14(35.0)	3(7.5)	0(0.0)	1.43±0.84	9(20.9)	31(72.1)	3(7.0)	0(0.0)	1.07±0.70
人材育成、地区組織等の 育成	16(39.0)	17(41.5)	8(19.5)	0(0.0)	1.00±1.10	20(47.6)	18(42.9)	3(7.1)	1(2.4)	1.26±0.96
市町村に対する支援、連 携対策作り	14(38.9)	16(44.4)	6(16.7)	0(0.0)	1.06±1.04	14(35.0)	23(57.5)	2(5.0)	1(2.5)	1.18±0.87
食環境の整備（栄養成分 表示の推進等）	10(29.4)	18(52.9)	6(17.6)	0(0.0)	0.94±1.01	10(25.7)	24(61.5)	5(12.8)	0(0.0)	1.00±0.89
食生活支援、専門的栄養 教育（指導）	10(28.6)	23(65.7)	2(5.7)	0(0.0)	1.23±0.60	9(23.1)	24(61.5)	6(15.4)	0(0.0)	0.92±0.93
健康教育、健康相談、栄 養教育（指導）	21(63.6)	10(30.3)	2(6.1)	0(0.0)	1.52±0.80	19(61.3)	9(29.0)	1(3.2)	2(6.5)	1.35±1.11
学習の仕方	16(40.0)	19(47.5)	5(12.5)	0(0.0)	1.15±0.95	8(18.6)	32(74.4)	3(7.0)	0(0.0)	1.05±0.69

### 3) 給食管理分野

臨地実習に対する期待と実習後の理解度を「管理栄養士像」、「組織と栄養部門の位置付け」、「経営管理」、「献立管理」、「食材料管理」、「食数管理」、「作業管理・大量調理・設備」、「衛生・安全管理」、「栄養管理」、「栄養教育（指導）」、「対象者・他職種との関わり」、「学習の仕方」の項目に区分し、それぞれの質問項目で調査した結果を示した（表3）。

期待度の高かった項目は、「献立管理」、「衛生・安全管理」であった。一方、期待度の低かった項目は、「対象者、他職種との関わり」、「組織と栄養部門の位置づけ」であった。

理解度の高かった項目は、「管理栄養士像」、「衛生・安全管理」であった。一方、理解度の低かった項目は、「経営管理」、「栄養教育（指導）」であった。

「対象者、他職種との関わり」については、期待できると回答した学生が82.8%に対し、実習後、理解できたと回答した学生は、100.0%であった。このことは、学内の実習では把握が困難であり、臨地実習施設で喫食者と直接話をする機会が得られた成果と考えられる。

給食管理分野の教育目標は、給食業務を行うために必要な、食事の計画や調理を含めた給食サービス提供に関する技術を習得すること（給食の運営）。また、給食運営の管理者として資材、人材、栄養、安全、経済の全般にわたるマネジメントの基本を習得すること（給食経営管理理論）である<sup>5)</sup>。今回の調査で学生が期待することは、給食の運営に係ることが大部分であった。給食経営管理理論と給食の運営の学習目標や内容の違いを学生へ理解しやすいように教育する必要があると考えられる。そして、給食の運営としての実習内容にとどまらず、給食経営管理理論である給食全般のマネジメントについて学ぶことができる実習になるように取り組んでいくことが必要である。

また、栄養教諭制度の導入にともない学校での給食管理実習と学校栄養教育実習の区分についての検討が必要である。

表3 臨地実習に対する期待と実習後の理解度（給食管理分野）

単位：人数（%）

項目	実習前の期待の程度					実習後の理解の程度				
	かなり期待できる	少し期待できる	あまり期待できない	全く期待できない	評価平均点 平均±標準偏差	かなり理解できた	少し理解できた	ほとんど理解できなかった	全く理解できなかった	評価平均点 平均±標準偏差
管理栄養士像	32(55.2)	25(43.1)	1(1.7)	0(0.0)	1.52±0.60	43(78.2)	12(21.8)	0(0.0)	0(0.0)	1.78±0.42
組織と栄養部門の位置付け	9(15.5)	44(75.9)	5(8.6)	0(0.0)	0.98±0.71	26(47.3)	27(49.1)	2(3.6)	0(0.0)	1.40±0.68
経営管理	22(37.9)	29(50.0)	7(12.7)	0(0.0)	1.14±0.93	18(32.7)	32(58.2)	4(7.3)	1(1.8)	1.13±0.88
献立管理	40(69.0)	16(27.6)	2(3.4)	0(0.0)	1.62±0.67	39(70.9)	15(27.3)	1(1.8)	0(0.0)	1.67±0.58
食材料管理	32(55.2)	23(39.7)	3(5.2)	0(0.0)	1.45±0.75	32(58.2)	21(38.2)	1(1.8)	1(1.8)	1.49±0.77
食数管理	29(50.0)	27(46.6)	2(3.4)	0(0.0)	1.43±0.68	31(65.4)	22(40.0)	1(1.8)	1(1.8)	1.47±0.77
作業管理、大量調理、設備	33(56.9)	24(41.4)	1(1.7)	0(0.0)	1.53±0.60	32(58.2)	23(41.8)	0(0.0)	0(0.0)	1.58±0.50
衛生・安全管理	36(63.2)	20(35.1)	1(1.8)	0(0.0)	1.60±0.59	41(74.5)	14(25.5)	0(0.0)	0(0.0)	1.75±0.44
栄養管理	26(44.8)	30(51.7)	2(3.4)	0(0.0)	1.38±0.67	25(45.5)	28(50.9)	2(3.6)	0(0.0)	1.38±0.68
栄養教育（指導）	29(50.0)	25(43.1)	4(6.9)	0(0.0)	1.36±0.81	27(50.0)	24(44.4)	2(3.7)	1(1.9)	1.37±0.83
対象者、他職種との関わり	15(25.9)	33(56.9)	10(17.2)	0(0.0)	0.91±0.98	33(60.0)	22(40.0)	0(0.0)	0(0.0)	1.60±0.49
学習の仕方	32(56.1)	23(40.4)	2(3.5)	0(0.0)	1.49±0.68	22(40.7)	32(59.3)	0(0.0)	0(0.0)	1.40±0.49

## 2. 臨地実習に対する不安と実際

臨地実習に対する不安の程度、また、不安に思っていることが臨地実習中に実行（維持）できたかどうかを「学習力」、「体力」、「あいさつ」、「礼儀・作法」、「人間関係」の項目に区分し、それぞれの質問項目で調査した結果を示した（表4）。

かなり不安であると回答した学生が多かった項目は、「学習力」41.7%であった。一方、かなり不安であると回答した学生が少なかった項目は、「あいさつ」3.3%であった。

実習中、あまり・全く実行（維持）できなかったと回答した学生が多かった項目は、「学習力」10.0%であった。一方、「あいさつ」、「礼儀・作法」について実行できなかったと回答した学生はいなかった。

臨地実習施設から理解や実行ができていないと指摘された内容について述べる。理解および実行ができていないと指摘された件数は、「学習力」39件、「礼儀・作法」8件、「コミュニケーション」7件、「あいさつ」4件、「体力」1件の計59件であった。「学習力」については、

調理技術、専門的知識、指導案等の計画・立案能力等、「礼儀・作法」については、身だしなみ等、「コミュニケーション」については、傾聴の姿勢、患者との接し方等が不十分と指摘された。

臨地実習において「学習力」、「コミュニケーション」、「礼儀・作法」が問題である。学習力の調理技術については、学内での調理実習等で教育を強化する必要がある。また、日頃から積極的に料理を作るよう指導する必要がある。専門的知識については、日々の授業に真剣に取り組み予習・復習をしっかりとる。また、学外で行われる講演等へ出かけ、学生自身ももっと積極的に学習する必要がある。指導案等の計画・立案能力については、平成17年度から栄養教諭に関する科目が開講されることで改善が期待される。コミュニケーションについては、日常生活において、同世代の友人だけでなく色々な人たちとの会話を心がけるよう指導する必要がある。本学では臨地実習前に特別講義として「礼儀・作法」、「人権問題に関する教育」の講演を各1回開講し受講させている。マナーやコミュニケーションは、日々継続することで身に

つくため、教育方法の検討が必要である。

臨地実習の現在の評価方法では、評価内容が担当管理栄養士の主観によるところが大きく、客観的な評価を求められるようになっていない。文章による評価は主観的になりやすく、読む人によっても感じ方は違ってくる。今後、

臨地実習に際して、客観的で適正な評価が必要であり、基本的態度・課題・研究・知識・技術等、具体的な項目を表記したものを、数値で評価できる実習評価表が必要である。適正な評価によって、臨地実習以降の学習が充実してくる<sup>6)</sup>。

表4 臨地実習に対する不安と実際

単位:件(%)

項目	不安の程度				実行度			
	全く不安でない	少し不安である	やや不安である	かなり不安である	実行(維持)できた	ほぼ実行(維持)できた	あまり実行(維持)できなかった	全く実行(維持)できなかった
学習力	1(1.7)	17(28.3)	17(28.3)	25(41.7)	12(20.0)	42(70.0)	5(8.3)	1(1.7)
体力	10(16.7)	33(55.0)	11(18.3)	6(10.0)	38(64.4)	16(27.1)	4(6.8)	1(1.7)
あいさつ	26(43.3)	24(40.0)	8(13.3)	2(3.3)	36(60.0)	24(40.0)	0(0.0)	0(0.0)
礼儀・作法	8(13.6)	36(61.0)	9(15.3)	6(10.2)	25(41.7)	35(58.3)	0(0.0)	0(0.0)
人間関係	11(18.3)	27(45.0)	14(23.3)	8(13.3)	19(31.7)	38(63.3)	2(3.3)	1(1.7)

### 3. 管理栄養士としての就業意識に関する臨地実習前後での比較

「管理栄養士としての就業意識」について臨地実習前後で比較した結果を示した(表5)。実習前は「思っている」48.3%が実習後は65.0%、「少し思っている」は48.3%が35.0%、「まったく思っていない」は3.4%が0%と管理栄養士としての就業意識は実習前に比べ実習後で有意に増加していた( $p=0.0130$ ,  $t$ 検定)。

臨地実習は、学生に将来の職場を考えるよい機会である。「管理栄養士になりたい」と思う気持ちが高まれば、管理栄養士としての知識をさらに修得しようとする意欲につながる。

表5 管理栄養士としての就職意識

項目	n=60 単位:人(%)	
	実習前	実習後
思っている	29 (48.3)	39 (65.0)
少し思っている	29 (48.3)	21 (35.0)
全く思っていない	2 (3.4)	0 (0.0)
合計	60 (100.0)	60 (100.0)

### 4. 臨地実習全体を通して

#### (1) 学生の期待と理解

学生の臨地実習に対する期待は高く、理解度に対する自己評価も高い。しかし、臨地実習施設からの評価では、理解および実行できていないと指摘された件数が多く、学生の自己評価と実習施設の評価で差が生じていた。

#### (2) 事前・事後の教育の充実

「学習力」の不足に関しては、学内の実習を充実させることが重要である。また、「コミュニケーション」、「礼儀・作法」については、1年次から日々の授業の中で臨地実習担当教員以外の教員も含め、全教員で指導にあたる必要がある。また、報告会には、臨地実習担当教員以外の教員も参加し、活発な討議を行う会にすることで、学生の視野を広めることができる<sup>7)</sup>。さらに、次年度では管理栄養士実務演習の時間を増やしていく予定である。

#### (3) 実習施設との連携教育

実習依頼および実習期間中の見回り時に、情報交換を深める。報告会に、実習施設の指導者に参加を要請し、その場で意見交換をすることにより充実した事後学習を行うことができる<sup>8)</sup>。さらに、管理栄養士の適正人員の配置がなされるよう協力が必要と考えられる。また、評価表の改善については、公衆栄養の分野で県栄養士会と県栄養士養成施設協議会で検討し、改訂をすすめている。

## (4) 効果的な実習教育方法

臨地実習前の事前学習に十分な時間をとり、予備知識と心構えを教育し、学生のモチベーションを高めることが効率的な教育へつながる。また、平成17年度では、公衆栄養分野の臨地実習を半期遅い4年前期に実施する。これにより、学内での教育を十分行った後、臨地実習に臨み、充実した実習となると考えられる。

## (5) 教育・指導の方向性

3年前期に開講される管理栄養士実務演習が臨地実習のスタートではなく、「コミュニケーション」、「礼儀・作法」については、1年次から教育が必要である。本学では、特色ある教育の一環として、1年次から3年次まで学科全教員による少人数教育〔チュートリアル〕を実施している。この時間を活用し、全教員で取り組むコミュニケーション能力の育成や礼儀・作法の習得に向けた具体案を検討する。さらに、学生一人ひとりが目的意識をしっかりともち学内の実習に取り組むことが重要である。このためには、早い時期から現場で活躍している管理栄養士に接することで、目標となる管理栄養士像を具体的にイメージできることが有効と考える。実習施設の管理栄養士を非常勤講師として契約し、1年次より特別授業を実施するなどの臨地実習に対応したカリキュラムの工夫も必要と思われる。

活学部 人間栄養学科編) pp.10-36.

- 6) 渡辺啓子：臨地実習の実際 九州中央病院. 臨床栄養 (2005) pp.181-185.
- 7) 西村早苗, 吉岡有紀子, 武見ゆかり, 二見大介：臨地実習の計画と実施 公衆栄養学-「臨地実習」としての新しいあり方を求めて. 臨床栄養 (2005) p.165-170.
- 8) 山部秀子：臨地実習の計画と実施給食経営管理論. 臨床栄養 (2005) pp.171-175.

## 参 考 文 献

- 1) 中村丁次：いま、なぜ臨地実習なのか. 臨床栄養 (2005) p.159.
- 2) 「臨地・校外実習の実際-改正栄養士法の施行にあたって-」(日本栄養士会, 全国栄養士養成施設協会編), (2002) p.6.
- 3) 西村早苗, 石田裕美, 武見ゆかり, 渡邊早苗, 岡崎光子, 太田和枝, 吉田企世子, 二見大介：管理栄養士養成における臨地実習プログラムの開発に関する研究-臨地実習に対する学生のニーズと実習後の自己評価-. 女子栄養大紀要 vol.34 (2003) pp.115-121.
- 4) 松崎政三：臨地実習の計画と実施 臨床栄養学. 臨床栄養 (2005) pp.161-164.
- 5) 「臨地実習 実習生のしおり」(中国学園大学 現代生